

# 古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

大問十七（出典：『宇治拾遺物語』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

昔、格助（体修） 清明 格助（体修） が 格助（体修） 土御門 格助（体修） の 格助（体修） 家 格助（体修） に 格助（体修） 老い白みたる老僧来たり（※1）ぬ。完了・終 十歳ばかりなる童部二人具したり。サ変・用存続・終

清明、副 「何ぞの人にておはするぞ」と問へば、格助（四・已） 「播磨国の者にて候ふ。格助（四・未意志・終） 陰陽師を習はん（※2）志に格助（四・未意志・終） 候ふ。丁（老・晴） この道に殊にすぐれておはします由を承りて、副 少々習ひ参らせんとて参りたりつるなり」といへば、格助（主格） 清明 格助（主格） が 格助（主格） 思ふやう、「この法師はかしこき者にこそあるめれ。我を試みんとて来たる者なり。それに格助（主格） わろく見えてはわるかるべし。この法師少しひきまさぐらん」と思ひて、副 供なる童部は、式神を使ひて来たるなめりかし。式神ならば格助（主格） 召し隠せ（※3）と心の中に念じて、袖の内にて印を結びて、ひそかに呪を唱ふ。さて、法師にいふやう、「とく帰り給ひね。後によき日して、習はんとたまはん事どもは教へ奉らん」といへば、感動形（語幹） 法師、「あら貴」といひて、手を摺りて額に当てて立ち走りぬ。接尾（係助） 下二・用謙・請・老・意志・終

※1…カ行変格活用「来」+完了存続の助動詞「たり」と解釈しても文脈上は大して支障はないが、「来てはいる」「来てしまった」とするよりは単純に「来る」と訳せるほうが自然だと判断し、一語の動詞「来たる」を採用した。

※2…「婉曲」で解釈しても理解できない文脈ではないが、「習はんとする志」として「意志」で解釈する方が訳が自然であると判断した。

※3…「召す」は尊敬語で「お呼びになる」「召しあがる」「お召しになる」などの訳が基本だが、「す」の尊敬語として文脈に依存した訳を当てる場合もある。その一種である「くを取り上げなさる」という形で今回は訳している。また、敬意の方向については、陰陽師である安倍清明が「自身の式神を用いて相手の式神を封じる」という場面なので、術者である清明が自身の式神に頼み込むという形式を採用して「清明↓清明の式神」としている。

◎現代語訳（↓ステップアップノート30 古典文法トレーニング参照）